



# 一つの音楽

---

---

---

kou

---

## 始まり

---

カフェや喫茶店や居酒屋やファミレスに限らず、ここ最近ビートルズの曲をよく耳にする。

そのとき僕がいたカフェでは、『HELP』が流れていた。とてもシンプルな曲構成で、歌詞は英語にも関わらず人間の感情を惜しみなく表現し、こちらまで伝わってくる。

ビートルズは今から約五十年前に活動していたバンドである。一九六〇年代から約十年間トップを走り続け、まさかの解散。

が、今もなお色褪せず聴かれて続けている。

僕がビートルズの曲を真剣に聴きだしたのは高校二年生の秋だと記憶している。なぜそんなに鮮明に覚えているかということ、失恋を経験したからだ。僕の高校は比較的校則が緩く、髪の色も茶であったり金であったり、たまにミドリムシのような色の人もいた。だが、その失恋を味あわせてくれた子は、肩まである黒髪。肌も白く。清楚系だった。普段は物静かだが、友達と喋るときは明るい。僕は惹かれるものがあった。それなりに仲も良く、これならいけるだろ、と半ば勢いこんで告白したのだが、「バイト先の人とつきあってるの」という僕の知らない情報を打ち明けられた。それ以来、僕は数日ショックで元気をなくした。

その子はビートルズが好きで、僕は何枚かアルバムを借りていた。借りる前まではポップスやロックしか聴いたことがなかった。でも実際にビートルズを聴いてみて衝撃を受けた。ポップスもロックもジャズもビックバンドのような曲構成も全て網羅していたからだ。そんなビートルズのアルバムを貸してくれた彼女に惚れないわけではない。まだ当時は十七という年齢で古い音楽をこよなく愛す彼女と一緒に過ごすことができたらどんな気持ちだろう、という青春時代特有の妄想にふけたが、駄目だった。

というのをカフェでパンケーキを食べながら思い出した。パンケーキは甘いのに、どこことなく思い出は苦かった。

## 終わり

---

ビートルズは曲も知名度も凄いというのはある程度、年齢を重ねるとわかることだと思うけど、六本木のバーに入り浸るとその効力を三倍になる。なぜなら外人さんは六本木が好きなのか、よく僕がいくバーにいる。それで常連ぶっている僕は外人に声を掛けられる。。僕は英語は喋れないが、外人さんは日本語が流暢なのでコミュニケーション的には問題ない。でもって話題に上るのが音楽の話になる。そうなるとなぜだかわからないが、何かに導かれているのかビートルズの話になる。

どのアルバムが好きか？

メンバーは誰が好きか？

一番好きな曲は何か？

という熱いトークを繰り広げる。国境を超えてここまで熱く語れるミュージックは早々ないし、いないと思った。結局、仲が深まり、今でも進行が続いている。さらにはその外人さんの自宅に招待され、「結婚するんだ」と軽い調子で言われ、僕は独身ということに焦りを覚えた。

その時々で曲というのは人によって思い出が詰まっているものだが、僕にとってビートルズというのは苦い思い出も、良い思い出も詰まっている。

気づけばカフェ内の曲が、『LET IT BE』に変わっていた。そして僕はパンケーキを完食した。